

目 次

- (1) 事業報告
 - 外国人のための「1日インフォメーションサービス」
 - エアプサン関西国際空港就航3周年記念「日韓高校生交流事業」
 - 関西国際交流ボランティアネットワーク会議 (KIV-NET) 総会
- (2) インターン報告
 - ラトビア全国歌と踊りの祭
- (3) 地域に根差した外国人支援
 - ちがいを地域の豊かさに～箕面市におけるグローバル化時代の地域づくり～
- (4) 大阪府外国人情報コーナー
 - 外国人の起業(2)
- (5) OFIX国際交流員レポート
 - フィリピンで英語留学

(1) 事業報告

■ 外国人のための「1日インフォメーションサービス」

平成25年6月9日(日)午前11時～午後5時まで、大阪国際交流センターで、今年で22回目となる外国人のための「1日インフォメーションサービス」が開催されました。

相談内容としては、法律、人権、出入国・在留、労働、職業、保険年金、生活、市政、税金、医療、歯科、薬剤、進学、子育てなどで、OFIXからは主任相談員がその他生活一般にかかわる情報の提供及び相談ブースでの相談を行いました。

対応言語としては、英語、中国語、韓国・朝鮮語、スペイン語、ポルトガル語、インドネシア語、タイ語、フィリピン語、ベトナム語で、OFIXとして21名の通訳ボランティアを派遣しました。当日は24カ国・地域から123名の相談者が来場され、熱心に相談されていました。

今後もこのような取り組みを継続していきたいと思います。



■ エアプサン関西国際空港就航3周年記念「日韓高校生交流事業」

OFIX及びエアプサン主催、新関西国際空港(株)、大阪観光局協賛で、大韓民国釜山広域市の10名の高校生および釜山のテレビ局、新聞社を招いての「日韓高校生交流事業」を6月10日(月)から6月13日(木)の3泊4日の日程で行いました。

6月10日(月)は関空到着後、「わくわく関空見学プラン」で関西国際空港の特別見学ツアーに参加。その後大阪府立泉北高校の英語の授業に参加しました。自分の将来のキャリアプランについて発表し、授業終了後は各種部活の見学を行いました。

6月11日(火)は午前中に大阪府都市魅力創造局の天下局長を表敬訪問し、その後、都市魅力創造局のスタッフの皆さんによる大阪の魅力の英語でのプレゼンテーションがありました。お昼は駐大阪大韓民国総領事館の李総領事を迎えての歓迎レセプションを開催し、レセプション後はOFIXホームステイボランティアに連れられて1泊2日のホームステイを楽しみました。6月12日(水)午後にはホテルに戻り、夕食は難波の回転すしを体験しました。



(天下局長表敬訪問時の模様)

6月13日(木)は海遊館、サンタマリアクルーズ、昼食には串カツ体験、午後には大阪城を観光しました。

全員、大阪にまた来たい、将来は大阪に留学したいと、大阪の文化と食を満喫し、大満足の様子で、将来の日韓の架け橋としての希望を胸に、エアプサンのフライトで、釜山へと帰国の途に着きました。

■ 関西国際交流ボランティアネットワーク会議 (KIV-NET) 総会

関西国際交流ボランティアネットワーク会議(KIV-NET)の第18回総会を5月29日(水)に公益財団法人京都府国際センター会議室で開催しました。

平成24年度の活動報告や今年度の活動計画案の審議を行った後、(公社)アジア協会アジア友の会および(公財)京都府国際センターから活動報告があり、その後、メーリングリスト

等を通じて情報の共有を図り、いかに活動を活発化していくかの話し合いが行われました。

KIV-NETはAPEC大阪会議の開催をきっかけに、関西の国際イベントにおける語学ボランティア支援を行ってきたネットワーク会議です。

新しく加盟されたい団体の方はOFIXまでご連絡下さい。

(2) インターン報告

■ ラトビア全国歌と踊りの祭

初めまして、関西外国語大学のインターンシップ制度により、6月~8月までOFIXでお世話になるザハラカ・シグネと言います。どうぞよろしくお願いいたします。



私の母国ラトビアの歴史に重要な役割を持つ、文化的な事柄“ラトビア全国歌と踊りの祭”を紹介します。

この祭は古く1873年にラトビア人の団結と独立を目的に、リーガ(ラトビアの首都)にあるラトビア人協会が始めました。祭は徐々に広がりをみせ、第二次世界大戦の期間を除けば、ロシア帝国の時代でもソビエト連邦の占領下でも、全国で祭は催されていました。1948年には、祭の歴史の中で初めて、ラトビア人の合唱隊と共にフォークダンスの舞踊団が出演し、それにより祭は今の地位を得ました。

ラトビア人協会の目標が達成され、国が独立した後も、この習慣はラトビアの文化に深く組み込まれ、今でも国民は大切に思っています。ラトビア全国歌と踊りの祭の重要性はラトビア人だけではなく、UNESCOにも認識され、2003年に世界遺産に登録されました。140年前にこの祭が発祥しなかったら、また夏祭の習慣が続かなかつたら、現代のラトビアという国は生まれなかつたかもしれません。だから、歌と踊りの祭がないラトビアは考えられません。

この祭はラトビア人にとっていかに特別な意味を持つかということは、熱心に合唱隊やフォークダンスに参加する人の数から判断することができます。多くの人は伝統芸能に参加

ザハラカ・シグネ(関西外国語大学 留学生別科)

することを誇りに思い、祭に参加するため、遮二無二練習しています。けれども努力しても、参加者として選ばれるのはそんなに簡単なことではありません。希望者は選考を受け、厳しい競争で試されます。そのため、多くの親は子どもを幼い頃から踊りや歌のグループに入れます。しかし、選ばれても競争は終わりません。最後に国内で一番優秀な合唱隊と舞踊団を決めるため、祭の最終日までコンテストがあり、勝者は表彰されます。今年の祭には以前の記録を破る推定4万人が競い合うという情報もあります。

合唱隊員とフォークダンスサークルのメンバー以外にも、祭には音楽家、民芸職人、吹奏楽団員、コクレという伝統的なラトビアの楽器を弾く人や素人の役者も出るということになります。今年も少なくとも60の行事が決まっています。具体的に言うと、合唱隊の360曲以上にも上る伝統的な民謡のアカペラコンサート、民芸博覧会、ダンサーによる昔ラトビア国内に住んでいた部族がよく織物に使用していた複雑なジオメトリック装飾を模して踊る戸外のパフォーマンスなどのようなイベントがある予定です。祭りは民族衣装のパレードと世界で一番大きい屋外の演奏会で終わります。伝統的に最後の曲は、「光のお城」という歌で、例えテレビ中継であっても、感動せずにはいられません。

一週間の間、祭の参加者が国のそれぞれの地域から首都に移動するおかげで、普段は物静かなリーガ旧市街の通は賑やかになり、どこに滞在しようとも歌と音楽が聞こえ、大騒ぎなので、その雰囲気の影響で気持ちが高揚してしまいます。参加者のみならず、観客でも一生忘れられない経験になるはずなので、北欧にいったら、ぜひラトビアを訪問して下さい。

今年の祭は6月30日~7月7日に開催されますが、今年の祭に間に合わなくても、がっかりしないで下さい。なぜなら、次の祭がラトビア独立100周年を迎える2018年に行われるからです。この年の祭はきっと今までの中で一番大きな祭になるので、見逃さないように、先行切符を買った方がいいかもしれません。

(3) 地域に根差した外国人支援

■ ちがいを地域の豊かさに～箕面市におけるグローバル化時代の地域づくり～

(公財) 箕面市国際交流協会 事業課長 河合大輔

大阪市内から国道 423 号線（新御堂）をまっすぐ北上すると美しい緑の山並みにいきつきます。その裾野に広がるのが箕面市です。人口は約 13 万人。70 年代からの開発により大阪中心部へのベッドタウンとして発展してきました。2013 年 5 月には市東部に箕面市立多文化交流センターがオープンし、(公財) 箕面市国際交流協会（以下、「協会」）は、これを地域国際化の拠点とすべく活動中です。



オープニングイベントのひとつ
留学生たちによるベトナム獅子舞

市内に在住する外国籍住民は約 2,200 人。人口比 1.7%は全国平均とほぼ同じですが、国籍数は 89 カ国・地域にも上ります（2013 年 4 月末現在）。市内および近隣に大阪大学の 3 つのキャンパスがあり、留学生とその家族が多数在住していることが大きな要因となっています。他方で、いわゆるオールドカマーの特別永住者や一般永住者が全体の 4 割を、また就労などその他の在留資格者が約 2 割を占めており、在住背景も多様です。

協会はこの多様性を二つの面で捉えてきました。ひとつは多様であるが故の困難さ、つまり在住外国人が境遇を同じくする人々と地域のなかで出会うことの難しさ、孤立しやすい地域性という側面です。もう一つは、逆に様々な文化を背景にした人たちと出会えるという他の地域にない特色、豊かさを生み出す可能性があるという面です。この両面を踏まえ、「個別性に対応しうる支援のシステムづくり」と「多様性を豊かさにプロデュースする事業づくり」が、協会事業にとって大きなミッションであると考えてきました。

「支援のシステムづくり」の事業のひとつが生活相談事業です。協会では毎週火曜日午前 11 時 30 分から午後 2 時まで、日本語、英語、韓国・朝鮮語の三言語で生

活相談を受け付けており、第 2・4 火曜日には、これにインドネシア語とフィリピン語が加わります。しかし自動車による移動を主とする地域性もあり来館での相談はハードルが高い状況があります。その意味で、学校など地域の他機関との連携は重要です。とりわけこの数年間は、内閣府のモデル事業として市内の NPO が実施したパーソナルサポート事業と連携し、寄り添い型・制度横断型の支援を行うことで、いくつかのケースにおいて課題の解決まで継続的なサポートを行うことができました。この事業は 2012 年度で国のモデル事業としては終了しましたが、外国籍住民が少数で点在する地域でのひとつの支援モデルとして、今後も検討されるべきものを提示したものと考えています。

次に「多様性を豊かさにプロデュースする」という事業では、在住外国人が講師となって地域の子どもたちに各国の文化やことばを教える企画「あそびとことばで世界を知ろう！」や、日本語の壁によって就労や社会参加が困難な外国人市民をシェフとして迎え、各国料理を通して地域交流を進めるコミュニティ・カフェ事業などを実施してきました。こうした事業では、在住外国人のもつ経験やスキルと地域住民のニーズとをうまくマッチングするための企画力や、また企画を単なる文化の消費に終わらせず、相互理解と地域参加につなげるコーディネーターなど協会職員の事業スキルが求められますが、それにも増して必要なのは外国人当事者の積極的な事業参加であると言えます。

協会では 2008 年度から在住外国人が自分たちの経験を語り合いながら、学校など地域で講演を行う外国人当事者のグループづくりを進めてきました。前述のコミュニティ・カフェ事業においても、実施主体として協会から独立した外国人グループを誕生させ、協働での事業づくりを模索しています。こうしたグループづくりは、当事者の積極的な参加を促進し、協会職員だけではカバーしきれない当事者同士のナイーブな共感や支え合いをも生み出しています。

それでも課題は尽きません。立ち位置の違う当事者グループと協会とのずれ違い、多様な文化的、社会的背景をもったメンバーによるグループづくりの難しさ…。越えなければならない壁は大きいですが、「事業の成果は結果にではなくそのプロセスにある」と信じ、協会職員とボランティアのパワーで、今後も試行錯誤を続けていきたいと思っています。

